

## 「話すこと・聞くこと」における指導の工夫 ～対話型の発表を取り入れた活動を通して～

那覇市立神原小学校教諭 鳩間 和香子

### テーマ設定理由

小学校学習指導要領解説国語編第1節第1学年及び第2学年「話すこと・聞くこと」の目標では「相手に応じ、経験したことなどについて、事柄の順序を考えながら話すことや大事なことを落とさないように聞くことができるようにする」と述べられている。

低学年において、「話すこと・聞くこと」の力を育てるためには、「知らせたいことを選び、事柄の順序を考えながら、相手に分かるように話すこと及び大事なことを落とさないようにしながら、興味を持って聞くこと」となっている。

「話すこと」は、話し手と聞き手が一対一となる活動を中心に置き、活動経験を積むにつれて一対複数の活動へ広げていくことが大切である。児童は具体的な言語活動の相手を設定することにより、話す活動への意欲が高まってくる。しだいに事柄の順序を考え相手にわかるように話そうとすることから、このような場を多く設定することが望まれる。「聞くこと」は、話し手が知らせたいと思っている事柄を聞くことが基本となる。自分に知らせたいことは何かという観点で、事柄の順序を意識しながら大事なことを聞き取ることが大切である。そのために教師は、話す内容や場面などを準備し、児童の側に立って、「話すこと」との関連を図ることが必要となってくる。

本学級では、「自分の考えや思いを伝える」をめあてに一対一あるいはグループでの発表に多く取り組んできた。少人数なので、目前に具体的な話す相手がいることにより、活動への意欲が高まり、進んで話すことができた。しかし、相手にわかるように順序立てて話すことや、大事なことを落とさず聞いて、その感想や質問をする等の課題が残った。

そこで、相手意識を明確にし、聞き手が発表に対してすぐに反応を返すことのできる、一対一の対話型の発表を取り入れることを通して、児童は、自分の思いや考えを伝えたり、相手の話に興味をもって聞いたりする態度が育ち、「話すこと・聞くこと」の力が育成できると考え、本研究テーマを設定した。

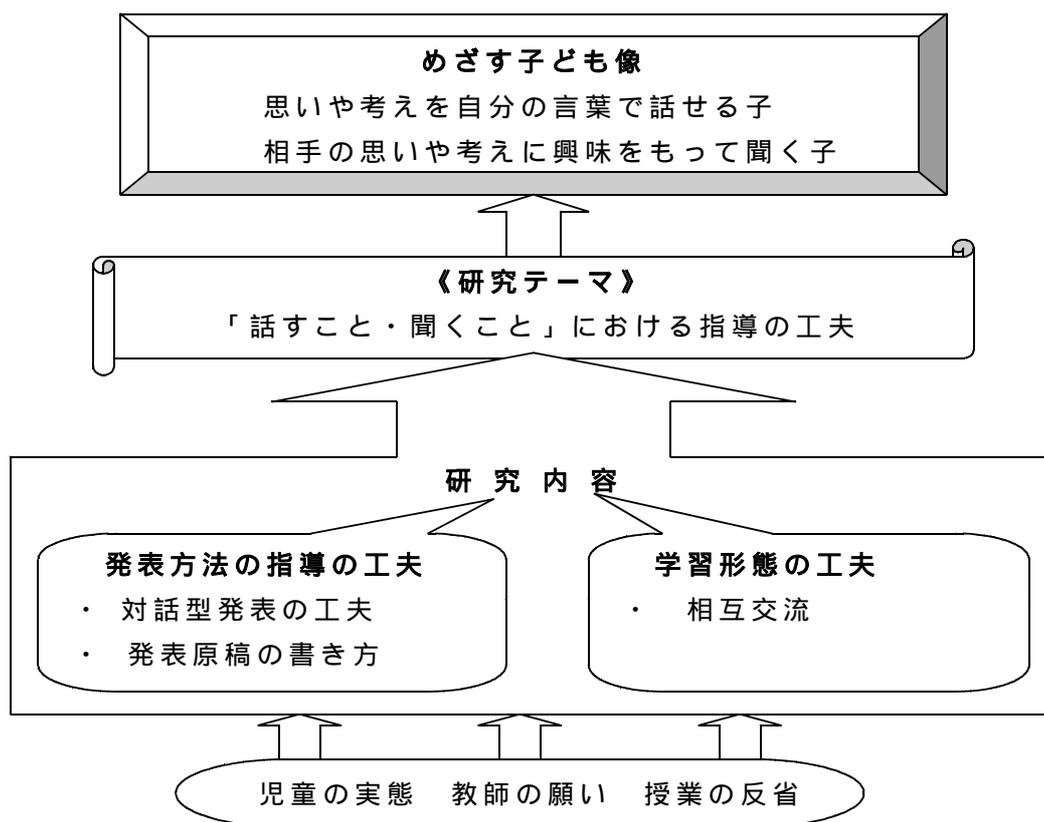
### 研究目標

自分の思いや考えを相手にわかるように話したり、人の話に興味を持って最後まで聞いたりすることのできる子を育てるために、「話すこと・聞くこと」における指導の工夫について研究する。

### 研究方針

- 1 「話すこと・聞くこと」の力を身に付けさせるために必要な技術や学習の方法を理論研究する。
- 2 「話すこと・聞くこと」における指導を工夫する。

## 研究構想図



## 研究内容と方法

### 1 第2学年「話すこと・聞くこと」の目標と基礎・基本

児童が進んで「話す・聞く」ということは、新しい経験をするたびに、それを話したり聞いたりすることに興味や関心を持ち、意欲的に言語活動に取り組もうとすることから始まる。各学年における「話すこと・聞くこと」の内容（表1）によると、2年生として身に付けさせたい「話すこと・聞くこと」の基礎・基本とは、「相手に自分の思いや考えを知らせる」ための「順序を考えて話す力」であり、並行して「話し手が知らせたいと思っていることを知る」ための「落とさないように聞く力」であると捉える。

「話すこと」の指導は、話形指導や大きな声・はっきりした発音、あいさつなど二次的言葉の教えこみに偏りすぎず、話す喜びやことばの創造性をそぎ落とさないために、ことばをつむぎ合う楽しさを味わわせることが大切である。「聞くこと」の指導は、聞いた内容を発表させたり、聞いた内容に沿って書く活動を組んだり等、最後まで聞かないと学習が進まない活動を設定し、主体的に聞く態度を身に付ける手立てが必要である。また、話し手の思いや願いに着目しながら、話すことの楽しさを話し手と共有できるようにさせる。そのためには、一方的に聞くことばかりでなく、尋ねたり共感したりするなど、双方向的なやりとりの中で聞くことが、大切なことである。「話すこと」と「聞くこと」の指導は両方を切り離して指導するのではなく、同時に螺旋的に指導されていくものである。

そこで、両者が交互に話し手・聞き手の役割となる一対一の双方向的な発表の活動場面において、発表方法の指導や学習形態を工夫し、「話すこと・聞くこと」の力を育成したい。

表1 各学年における「話すこと・聞くこと」の内容

	第1・2学年	第3・4学年	第5・6学年
ア	知らせたい事を選び、事柄の順序を考えながら、相手に分かるように話すこと。	伝えたいことを選び、自分の考えが分かるように筋道を立てて、相手や目的に応じた適切な言葉遣いで話すこと。	考えたことや自分の意図が分かるように話の組立てを工夫しながら、目的や場に応じた適切な言葉遣いで話すこと。
イ	大事なことを落とさないようにしながら、興味を持って聞くこと。	話の中心に気を付けて聞き、自分の感想をまとめること。	話し手の意図を考えながら話の内容を聞くこと。
ウ	身近な事柄について、話題に沿って、話し合うこと。	互いの考えの相違点や共通点を考えながら、進んで話し合うこと。	自分の立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合うこと。

## 2 「話すこと・聞くこと」の力を育むための手立て

### (1) 発表方法の指導の工夫

発表とは、ある事柄について経験したこと、調べたこと、本を読んだり人の話を聞いたりしてもった感想等を大勢の前で話す言語活動であると捉える。発表することによって、その事柄を一層詳しく理解するとともに、互いを理解し合うことにもつながる。

これまでの発表指導は、話し手を中心に「どうわかりやすく話すか」に重点が置かれていた。しかしこれからの学習においては、話すことと聞くことを双方向的な相互行為として捉える観点が必要だと考える。よってこれからの発表活動は、聞き手の「質問」「付け加え」を受けたやりとりによって、はじめの内容が広がったり深まったりすることを重視したい。

#### 一対一の学習形態を取り入れた対話型発表の工夫

低学年の児童は、好奇心が旺盛で、何事にも興味を示し、新しい経験をするたびにそれを話したり聞いたりすることに興味をや関心を持ち、意欲的に言語活動に取り組もうという特性が伺える。聞くという静的な活動よりも、話すという動的な活動を好む児童が多い。話すことが好きな低学年にとって普段のお喋りに似た形式である対話型の発表を用いることは、楽しみながら「話すこと・聞くこと」の力を育てると考える。

対話とは、村松によると「話すこと・聞くこと」の役割が固定化されてはならず、話し手・聞き手の役割が交互に繰り返され、二人の発話が不均衡だったり、未分化だったりせず、対称性を持って交わされる必要があるとなっている。そこで、一対一の対話型の発表は、相手を変えながら繰り返し話したり聞いたりできるため、児童にとって話す機会が増え、自分の話す内容が徐々に整理され、話すことに慣れるのではないかと考える。さらに、話し手は目前に聞き手がいるので、声の大きさや話している内容についても相手の様子から確認しやすく、言葉につまった時に、質問や促し等、相手の助け船も出してもらえる。聞き手は聞き役が自分一人しかいないので周りを気にせずに感想や質問を返すことができる。このように、両者とも自分の話を聞いてもらえたという満足感や相手の話を受けとめたという実感がその場で感じられる。特に「話すこと・聞くこと」の基礎・基本を身に付ける低学年にとって一対一の学習形態を取り入れた対話型の発表は、今後一対複数の発表に広げていくことにおいて有効であり、相手を意識しやすく、目的意識をもちやすい望ましい形式だと考える。

低学年における対話の目標として、村松によると

情意面...対話で話す楽しさを知り、話したり聞いたりすることに積極的になる。

認知面...ことばに対する関心を高める。

技術面...話題からそれずに対話のやりとりができるようになる。

となっている。

対話型の発表原稿の書き方の工夫

低学年において、話したいことを頭のなかで整理し、みんなにわかるように話すことは容易なことではない。そこで、発表をする際、話す内容を整理するためにも発表の原稿を書くことが必要であるとする。調べた事柄をカードにかき、その中から友達が興味をもって聞きそうな事柄を選ぶ。ここで教師がかかわることによって、聞き手がより興味のもてる内容を選ぶことができると同時に教師も一人一人の内容を把握できる。

調べた内容について事柄の順序を考えながら、相手にわかるように伝えるために、発表原稿(図1)を活用する。文頭では、調べた理由や話す内容を伝えることで、これからの話に興味をもたせる展開とする。文中では、「はじめに」「つぎに」の順序を表すつなぎ言葉を使った書き方をおさえる。事典から調べた事柄について難しい文章の場合、聞き手がイメージしやすくわかりやすい言葉になるよう教師の支援が重要である。

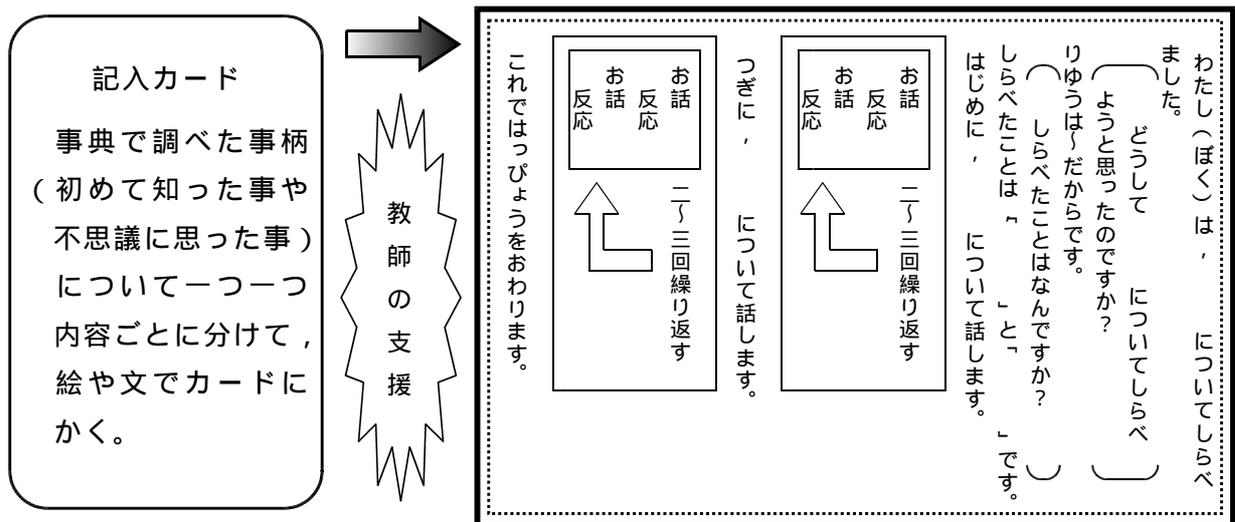


図1 発表原稿の書き方

具体物を用いた発表の工夫

発表において、視覚からの情報として捉えることのできる具体物を用いることにより、聞き手の理解を助けることにつながる。そこで、低学年の発達段階を考え、紙芝居・絵・模型等視覚で捉えられる具体物を「発表資料」として用いた対話型の発表を学習活動の中心とする。資料作成にあたって、自分の発表内容をよりわかりやすいものにするには、どの資料を使った方がよいか考えさせる。

聞き手にとっても大切な「聞くこと」の学習の場であることから、主体的に聞く力を育てるための重要な場として捉える。発表を聞いてわからないことは、質問したり、聞き返したりする習慣を身に付けることが主体的な聞き手を育てることにつながり、話し手が質問についてわかりやすく応答していくことで、「話すこと・聞くこと」の力が育つであろうと考える。

## 自作ビデオの活用

「話すこと・聞くこと」を指導するにあたり、これまで一方的な発表をしてきた児童にとって、双方向的なやり方を身に付けるための手立てとして教師が発表のデモンストレーションを行っているVTRを活用する。その言葉のやりとりを一つ一つ確認しながら進めていく事が、発表の仕方を理解することにより効果的であると考え。特に聞き手の反応に注目させ、聞き手が話の内容にあった感想や質問・感動の言葉を返していることを理解させる。発表において、聞き手が反応することにより発表の内容が深まることから、聞き手が大切な役割を持つことに気づかせ主体的に聞く態度を育むものとする。

## (2) 相互交流の工夫

一対一での発表において互いに発表をしたり聞いたりした後、自分では気がつかないよいところや次へのアドバイス等の感想を交流することが励みとなり、次への目標を持つことにつながると考える。互いのよさを認め合うことが、心の交流を図り、自己を高め、楽しく学び合う態度を育てることができると考える。さらに、複数という人数の枠を広げたなかで個人のよさを認め合うことが、児童一人一人のより一層の励みとなり、主体的な言語活動になると考える。

発表後の評価を、担任や友だちから丁寧に行ってもらうことによって発表力は育てられ、次への意欲にもつながる。

### ふりかえりカード（自己評価）

自己評価をすることで、自分の学習を振り返り、次時のめあてを立てたり、学習への意欲につなげたりできる。教師も児童の学習状況を把握できると同時に教師からの励ましの一言を支援とすることもできる。

ここでは自己の話し方について評価させる。事前にふりかえりカード（図2）の内容を確認することで話し方のめあての理解にもつながると考える。またカードを作成する際、話し方の観点を絞り評価項目の明確化を図ったことや、頑張ったことの自由記述を入れることで、自分の頑張りを見つけさせる工夫をした。



図2 ふりかえりカード

### ありがとうカード（相互評価）

「話すこと」の評価を確かめるには、聞き手の立場から客観的に評価をしてもらうことが望ましい。その際、相互評価が有効であると考えられる。話し手は、聞き手から話し方の評価をしてもらうことで、自己の発表態度を知り、アドバイスを生かして、次の発表の目標ができ、励みとなる。また、聞き手も話し手を評価することを通して、分かりやすい話し方や自分と違った発表資料を知ることができ、自己の発表を高めることへとつなげる。

両者が具体的な観点を持って相互評価をすることにより、友だちのよいところを見つけようと、話す内容を最後まで聞くことができるだろうと考える。話を聞き終えた後に、ありがとうカード（図3）を書くという活動をさせることによって、主体的に聞こうとする態度が育まれると考える。

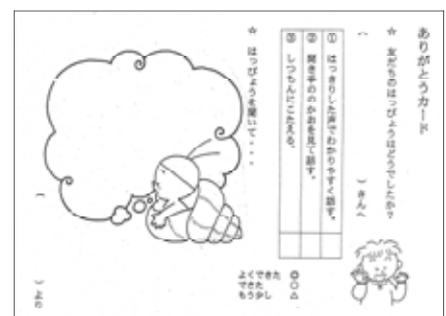


図3 ありがとうカード

## 授業実践

- 1 単元名           じゅんじょやようすを考えよう
- 2 教材名           生きものふしぎ図かんを作ろう
- 3 単元目標

文章の全体と部分の関係を考えながら，順序に気をつけて読んだり書いたりすることができる。

調べた生きものについて伝え合うことができる。

### 4 本時の学習

#### (1) 目標

調べたことを分かりやすく話したり，友だちの話をしっかり聞くなかで，双方向のやりとりを楽しむ。

#### (2) 本時における具体的な手だて

ありがとうカードの拡大版を掲示し，聞く視点を確認できるようにする。

#### (3) 仮説

聞く視点を明確にして発表を聞くことにより，質問や感想を伝えることができ，言葉のキャッチボールが続く対話ができるであろう。

### (4) 本時の展開

過程	学習内容	指導上の留意点および教師の支援	評価と方法
導入	<p>学習の流れをつかむ。</p> <p>今日のめあてを確認し発表する。</p> <p style="text-align: center; border: 1px dashed black; padding: 5px;">「生きものふしぎはっぴょう会」をしよう</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本時の流れを短冊に書き，見えるように掲示する。</li> </ul>	<p>本時で頑張ることを確認しているか。</p> <p style="text-align: right;">(観察・発表)</p>
展開	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ペアのうちの一人目が調べたことを発表し，質問や感想のやりとりをする。</li> <li>2 聞き手は相互評価（ありがとうカード）を書く。 話し手は，自己評価（振り返りカード）を書く。</li> <li>3 全体で一人目の児童の発表について感想交流し，カードをわたす。</li> <li>4 上手に発表していたペアのデモンストレーションを見る。</li> <li>5 ペアのうちの二人目が調べたことを発表し，質問や感想のやりとりをする。</li> <li>6 展開の2と3を繰り返す。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 慌てないように前もってペアになる二人組を作らせておく。</li> <li>・ 生きものが偏らないように児童全体を2グループに分け，その中で二人組みを作るようにする。</li> <li>・ 語と語，文と文のつながりに気をつけさせる。</li> <li>・ 頑張った事や次に頑張る事を考えさせワークシートに書かせる。</li> <li>・ よかったところを全体の場で交流させほめる。</li> <li>・ 上手にできているペアをほめる。</li> </ul>	<p>調べたことを発表資料を使って順序よく発表しているか。</p> <p style="text-align: right;">(話し手)</p> <p>発表を聞いて感想や質問をしているか。</p> <p style="text-align: right;">(聞き手)</p> <p>話し手は自己評価・聞き手は相互評価を書いているか。</p> <p style="text-align: right;">(評価カード)</p> <p>調べたことを発表資料を使って順序よく発表しているか。</p> <p style="text-align: right;">(話し手)</p> <p>発表を聞いて感想や質問をしているか。</p> <p style="text-align: right;">(聞き手)</p>
まとめ	<p>「生きものふしぎはっぴょうかい」を終えての感想を発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分が頑張ったことや次の発表会で頑張りたいこと等を発表させる。</li> </ul>	

## 結果と考察

### 検証 1

聞き手を意識した一対一の対話型の発表を工夫することにより、「話すこと・聞くこと」の力が育つであろう。

【手立て 1】 一対一の学習形態を取り入れた対話型発表の工夫

【結果】 一対一で向き合って両者が互いに話し手になったり聞き手になったりする活動をした。



へ～, そうなんだ。  
すごいなあ。

金魚の15さいは、人でいうと  
90さいとおなじなんだよ。

発表の様子	話し手 (A)	聞き手 (B)
A :	私は金魚について調べました。	
B :	何で金魚について調べたんですか？	《質問》
A :	自分で飼っていることとかわいいからです。	
B :	調べたことは何ですか？	《質問》
A :	金魚の寿命のことと体のことです。 始めに金魚の寿命のことをお話します。 何年生きるかというと、ちゃんと育てれば 14年から15年生かれます。	
B :	ちゃんと生きなかつたらどれくらいで死ぬんですか？	《質問》
A :	3・4年くらいだと思います。金魚の1歳は 人でいうと15歳くらいと同じです。 金魚の15歳は人でいうと90歳と同じです。	
B :	そうなんだ。すごいね。《分かったよの合図》	
A :	次に金魚の体のことを話します。金魚の体は 野生では見られない体もいます。	
B :	すごいですね。	《感想》
A :	私もこれを調べた時にびっくりしました。	
B :	ありがとうございました。	《挨拶》
A :	ありがとうございました。	

### 【考察】

聞き手は、図4のように、発表の内容を受けて、うなずきながら発表の資料を見たり、それに対する的を得た質問や感想を返したり、相手の話に興味を持って聞くことができた。話し手は、質問に対してスムーズに応じることができ、得意になって答えている様子が見られた。

また、「すごいですね」という聞き手の反応に対して話し手は「...びっくりしました」というやりとりから互いに同じ内容に感動を受

けたことがわかる。共通の感動をもてたという喜びを感じたであろう。このような双方向的な発表の形態を行うと、聞いて疑問に思ったことや感想が即座に話し手へ返すことができる。これは、聞いたらず返すという主体的な聞き方の指導にもつながったと考える。発表の最後には、互いに「ありがとうございました」という言葉を発している。これは、聞き手にとっては、知らなかったことを教えてくれたことの喜びであり、話し手にとっては、興味を持って聞いてくれたことの喜びの表れであろう。

児童のやりとりから話し手は、伝えたいことを相手に分かりやすく話すことができ、聞き手は、大事なことを落とさないように聞くことができたのではないかと考える。

図4 発表のやりとり

【手立て2】 対話型の発表原稿を書く工夫

【結果】 児童は、どのような順序で説明したら分かりやすい文章になるかを考えて、選んだ内容をまとまりごとに一つ一つ整理し、「はじめに」「つぎに」などのつなぎ言葉を使って文章を書くことができた。

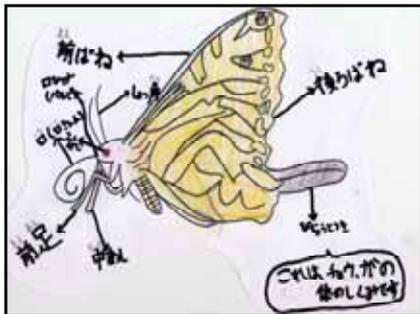


図5 発表資料

ぎなさ すしき すままな つ の よ た  
 (はつな) く なよつ (すすいちは) 口し (うり) わ  
 、はぎ かみへうぎ 。とよてじとら ちゆよ たし  
 ち、の わがん虫に ス2きう話め、べし よううど しは  
 )やみ色) りこかが、 ト本はのをに さたらをはとう は、  
 色どは にわがささ 口の、口し、なこべ見、思し、ち  
 がり、 足れおなな |ひぜはますぎとたたゆつて ち  
 \* (多色大 やたこぎぎ のげん、す。トの中、とはこめたち ち  
 いがき しらりにの 形のまス。ロ一の中、はとらののよ ち  
 多くよ、まな中 の間イトーのストはなす。池です。う ち  
 い分 つどするの 口にの口 のへんロ一で すか? ち ち  
 でけ かる。とへ てもよーの ようか? ち ち  
 すす。二 がろうさか のまに形 なす。よ う な ち ち  
 冬つ 作の虫なを みうまで ち。よ う な ち ち  
 をあ ら体のぎ話 つこきす。う な ち ち  
 こり れに時のし をとこ。 のち い べ べ  
 すま まなの中ま すがんつ のよ な ) ま ち  
 さす すり体です いででか 口よ ) ま ち  
 な。まの大。 まきいわ に う ち

\* ( ) は聞き手の反応

図6 発表原稿

【考察】

児童は、発表原稿を書く際、調べた事柄を一つ一つメモに分けてかいた中から、友だちが興味を持って聞きそうな最も伝えたい事柄を二つ選んで、まとまりごとに整理された文章を書くことができた。また、わかりやすい文章を書くために、文章の組み立てを考え、順序に気をつけながら語と語や文と文の続き方に注意して書かせることを指導した。対話型の発表に合わせて原稿を作成し、書き始めについては、全員が同じ対話になるように統一した。これは、対話に慣れさせることをねらいとしたからである。

児童(図6)は、書き始めに、ちょうちょを調べた理由・これから話す事柄がしっかりと書けている。また、文中においては、「はじめに」「つぎに」というつなぎ言葉を使い、話す事柄を順序よくまとめることができた。さらに、「~のような」という比喩表現を使い、聞き手にとってイメージしやすい工夫がされていた。

児童は発表原稿を書くことで、伝えたい内容を確認し、イメージすることで、自信を持って発表することができた。これは、話す内容を原稿として書くことにより、さらに自分の知識として理解できたからだと考える。このことは、調べた事柄をそのまま引用するのではなく、自分なりにわかりやすい言葉をつかって書いていた。発表前に話す内容が、しっかりと整理されているという事は、児童にとって「どう話していいのかわからない」「すらすら言葉が出てこない」といった不安を取り除くことにつながったといえる。

聞き手にとっても、しっかりと整理された文章であると、内容も分かりやすく聞きやすいため、話に合った質問や感想を返すことができる。さらに、話し手が少しずつ内容を伝えたり、聞き手の反応に回答しながらやりとりを進めることで、主体的に聞く態度の育成にもつながった。

しかし、発表原稿を見て話すことに集中してしまい聞き手の反応を確認しながら話を進めることが難しい児童もいたため、発表原稿の余白に、「聞き手の顔を見る」「発表資料を指さす」等の動作を書き込む工夫の必要があったのではないかと考える。

【手立て3】 視覚で捉えられる具体的な発表資料の作成

【結果】 発表をする時に具体的な発表資料をもって見せながら話すことにより、話し手は、話す内容を分かりやすく伝えることができた。また、聞き手にとっても話の内容をイメージしやすく、興味をもって聞く姿が見られた。

	話し手の作品	作品の工夫	聞き手の反応
模 型		前ばねとうしろばねのうごきのちがいをお話するために、もけいを作ったよ。動かすのを見せてせつめいができたよ。	トンボのはねには、きんにくがついていることや、はねの動きについてもわかったよ。 どうたいが、ほんもののトンボににっていたよ。
紙 芝 居 風		きせつごとに分けて、すずめがくらしているようすを、紙しばいみたいに作ったよ。	スズメのひなは、親から口うつしにえさをもらうんだね。 さむい時にはねをふくらませるんだね。
絵		キリンの舌の長さを知らせるために、口からしたごとび出すように工夫のある絵を作ったよ。	キリンのしたごとび出してきたので、ビックリしたよ。 キリンのしたの長さが30cmもあると聞いて、はじめてわかったよ。

図7 作成した発表資料の一例

【考察】

児童は、話の内容を発表資料として作成することにより、調べたことに対して思考を深め、調べたことを伝えたい・教えたいと意欲的に活動していた。伝えたい内容に沿った発表資料をいろいろな方法で作成する事は、話し手にとっても聞き手にとっても視覚に訴えることに有効であるということがわかった。

模型を作った児童(5名)は、説明に適切な言葉が見つからない時に、「このように・・・」「こうすると・・・」等、実際に話しながら動かしたり、触れさせたりして、お話を進めていた。色を塗ったり、模様を描いたり等、実物に近い立体感のある模型を作り発表することで、聞き手は話す内容をよりイメージしやすかったと考える。

紙芝居を作った児童(5名)は、時間の流れに沿った順序立てた内容を話すことに効果的であった。紙の裏にお話を書いておけるので、相手の反応を確認しながら話を進めていた。話す内容とタイミングよく絵が合致できる工夫や、昆虫が成長していく過程をお話風にして伝える工夫も見られた。自分でお話風にするということは、調べた内容をしっかりと把握し、理解で

きたからだと考える。

絵を描いた児童(25名)は、お話に合った絵を1～2枚にまとめていた。キリンの舌のことを伝えるために、実物に似た黒くて長い舌を絵から飛び出すような工夫をして聞き手の興味を引きつけていた。また、動きのある絵を描くことで聞き手はその様子を思い浮かべることができイメージしやすかったと考える。発表資料の種類も児童自身に決めさせることで、作品に個性が光り、発想の豊かさへもつながった。

低学年にとって言葉だけでは説明できない部分を補いながら視覚に訴えることのできる資料の提示は、より効果的な発表方法となった。

話し手は、具体物を用いることで、発表を苦手とする児童も、最後まで自信を持って意欲的に発表することができ、伝えることの意義を体得し、主体的な発表活動ができたと考える。聞き手にとっては、実際の具体物を見たり触れたりすることで、興味関心を持って聞き、相手の話す内容を理解することができた。

このように、具体物の活用によって、話し手・聞き手の理解や意欲が高められた。



資料を使って発表する児童

#### 【手立て4】自作ビデオの活用

#### 【結果】

発表の仕方を理解させるために制作した自作のVTR教材を視聴させると、「話した後に感想や質問をしているよ」「交代で話しているよ」「相手の顔を見て話しているよ」「うなづいてるね」等の気づきが見られた。また、「早く同じような発表がしたい」という意欲的な声も聞かれた。児童は、対話型の発表ができた。



指導用の発表資料

#### 【考察】

児童は、「最後まで聞き終えてから話す」「相手の顔を見てしっかり聞く」等の気づいたことを生かそうとする態度が見られた。ビデオ視聴の際、ことばのやりとりを一つ一つ確認しながら進める事により、児童は発表の仕方がわかり、真似をしようとしていた。どの児童も言葉の語尾を丁寧に使うことができた。自作のビデオを見ることによって、発表における話し方や相互の態度について理解を深めた。

#### 検証2

相互交流を行うなかで自他のよさを認め合うことにより、発表学習への意欲が高まるであろう。

#### 【手立て1】自己評価カードと相互評価カードを生かした相互交流



も話し手と聞き手の評価が一致している。

話し手である児童 A (図 8) は、一回目の発表において、聞き手である児童 B からの質問にしっかりと答えることができた。しかし、声が小さくなったことや相手を意識した目線にはなっていないことが両者の評価から伺える。二回目の発表では、一回目の経験をふまえ、声を大きくすることを頑張るというめあてをもち、達成することができた。児童 C から同様の評価と、さらに、今後に向けてのアドバイスを受けている。児童は、発表を振り返り、相互交流を含めた評価を用いることによって、自己の頑張り进行评估し、互いのよかった点やアドバイス等から新しいめあてをもち、発表にのぞむことが螺旋的に行われることで「話すこと・聞くこと」の力が育つと考える。

また、相互評価を通しての聞き手から話し手に対する評価 (図 9) をみると、同じ内容の話を相手を変えて繰り返すことで、「わかりやすく話すことができた」という評価が 93.9%、「質問に答えることができた」という評価も同様に 93.9% となっている。このように、相互交流を通して自他のよさを認め合うことにより、自信をもって話すことができたことから、発表する力が高まったと捉えることができる。

さらに、一対一から一対複数へと相互交流の枠を広げ、個人のよさを複数の中で認め合うことにより、「話すこと・聞くこと」の力を高める意欲へとつなげたい。

## 研究の成果と課題

### 1 成果

- (1) 発表方法を工夫することにより意欲的に学習に取り組むことができた。
- (2) 相手意識を明確にすることにより主体的に「話すこと・聞くこと」の意識を育てることができた。

### 2 課題

- (1) 聞くことを意識した指導の工夫
- (2) 「話すこと・聞くこと」領域における評価の工夫

### 《主な参考文献と引用文献》

- |                               |                        |      |
|-------------------------------|------------------------|------|
| 小学校学習指導要領解説 国語編               | 文部科学省 東洋館出版社           | 2004 |
| 国語指導用語辞典 第三版                  | 田近洵一 井上尚美 編 教育出版       | 2004 |
| 対話能力を育む話すこと・聞くことの学習 - 理論と実践 - | 村松賢一 著 明治図書            | 2005 |
| 相互交流能力を育てる「説明・発表」学習への挑戦       | 村松賢一 花田修一 若林富男 編著 明治図書 | 2004 |
| 国語科で育てる相互交流能力                 | 村松賢一 花田修一 若林富男 編著 明治図書 | 2000 |